

# 論理と感性

校長 吉田 隆

- ・ルノワール 「うちわを持つ少女」
- ・ゴッホ 「アルルの跳ね橋」
- ・ゴーギャン 「アレアレア」
- ・小島善三郎 「雪柳と海芋と  
ペルシャの壺」

新潟小学校には、このような名画の複写版が約百枚ストックされており、現在、右の作品を含む八枚が階段踊り場に展示されています。定期的に入れ替えられ、年間二十四作品が鑑賞できるようになっています。

休み時間に移動する際、自然に子どもたちの視野に入ってくる形で、特に鑑賞指導をしている訳ではありません。しかし、時折、立ち止まってじっと作品をながめている子どももいます。

このような感性を刺激する環境作りの効果もあってでしょうか、先月の展覧会でご覧いただいた子どもたちの絵画は、全体的に色彩がとても明るく伸び伸びと表現されていると感じました。同様の感想を述べられる参観者が数多くおられ嬉しく思っています。

ところで、感性を育むことの重要性は、芸術に留まるものではないと言われています。先日、音楽家であり数学者でもある中島さち子氏の、次の一文が目にとまりました。

「数学とは情緒の学問である。」論理の世界でも感性は重要。同様に音楽ではスランプに陥ったとき論理的なメタ認知が重要になる。感性と論理は互いに補完し合いながら成長していく相棒のようなものではないか。二十一世紀に特に重要なのは、「論理×感性」の創造力ではないかと考えている。

当校は十一月二日に、国立教育政策研究所の指定研究、論理的思考力を育てる授業の在り方を発表しました。

「主体的に聴き、自分の考えを深め広げていく子どもの育成」を研究主題に、七つの授業を公開しました。先生方の創意あふれる授業づくりと、子どもたちの学びに向かう姿に、講師として来校された学力調査官からも、高い評価をいただきました。

変化の激しい社会では、これまでの常識が通用しなくなり、新しい価値を生み出す創造力が益々必要となってきました。そのような未来社会を生きる子どもたちのために、当校では、論理と感性の両面から、子どもたちの可能性を引き出す教育活動を展開していきます。